

「佐賀の茶」話

馬渡 美樹



大浦慶と宮崎徳松の信頼関係

九州を代表する良質の茶産地嬉野。なだらかな山間地帯は霧が深く、温暖な気候と豊かな土地に恵まれ、全国8位の生産量を誇っています。その嬉野が育んだお茶が江戸時代、海を渡りました。



大浦慶

鎖国時代、隣接する長崎にはオランダ、ポルトガル、中国といった多くの外国人が代わる代わる訪れ新しい情報が飛び交っていました。幕末の長崎で油商を営んでいた大浦慶(1824～1884)は油に代わる商材として茶に目をつけ、大胆にもそれを輸出することを思いつきます。1853年開港を迫るペリーが浦賀に来航した年、慶はオランダ人テキストルに嬉野茶の見本を渡し、帰国の途中アメリカ、アラビア、イギリスに届けてくれるよう頼みます。それは上中下の3等級に分けられた、3袋ずつ計9袋であったと言います。

3年後の1856年(安政3年)、慶はイギリス商人ウィリアム・オールトから10万斤(60トン)とも12万斤(72トン)とも言われる巨額の注文を受けました。その頃、慶のよき協力者であったのが、肥前国藤津郡西嬉野村(現在の佐賀県嬉野市)で茶仲買をしていた宮崎徳松です。当時の慶と徳松の信頼関係を物語る逸話が残っています。

ある時、慶が注文した茶葉を牛に積んで県境の俵坂峠に差し掛かった頃、徳松の家が火事になったことを、家人が後を追いかけて知らせに駆けつけます。しかし、徳松は災難を承知しながら慶との約束を果たすため長崎へ向かったというのです。

嬉野茶が取り持った慶と宮崎徳松のご縁。慶は、ようやく集めた最初の1万斤(約6トン)を出島からアメリカへ送り出した後も、オールトとの信義のため嬉野のみならず九州一円の茶園拡大、茶畑開設に奔走しました。開国後も、九州(佐賀・長崎・熊本・宮崎・大分・鹿児島)の農家は輸出ブームと慶たちの努力によって茶の大量生産体制に入っていきます。



日本の茶貿易のはじまりは「嬉野製釜炒り茶」でした。慶の成功は、信頼と気概のある仲間たちの支えなしには語れません。そして、嬉野には嬉野茶発展の功労者のひとり、宮崎徳松がいました。嬉野茶は今なお、日本の茶業界の発展をけん引し続けています。